

とよひらのアートを旅する

「緑あふれる芸術文化の発信都市」を目指し歩み始めた札幌。区内にもさまざまな芸術の分野で活躍している方がいます。

今月は区内在住の画家お二人をご紹介します。身近な場所で生み出されるアートの世界に触れてみませんか。



▲自宅の庭に咲くバラを描く崎山さん。自宅アトリエで絵画教室を開く一方、民間の生涯学習講座で13年間絵画講師を勤めている。全道展会友。春陽会会友。

絵を描く魅力は夢中になれること。自分で表現したいと思うところに、行き着けたらうれしい。

水彩画家

崎山かづこさん(福住在住)

「いつも無心になって一生懸命描いています」と語る崎山かづこさん(七三)は十代のころから絵を描き始めました。当時、デザイン専門学校に通っていましたが、「自分のやりたいことはほかにあるのではないか」と思い一年で学校を辞め、会社勤めをする傍ら、主に裸婦のデッサン(素描)をしながらやりたいことを模索し続けていました。

「絵に色を付けるようになってからは三十代半ばになってから。当初は油絵も描いていましたが、水彩画に魅了され、次第に油絵からは遠ざかっていきました。『魅力は透明性ですね。水彩画は、どんなに濃い色を上重ねても下の色が出てくるでしょう。下の色は計算に入れないと、思い通りの色にならないのね。そこが面白いし苦労しているところなんです。なかなかできないものだから』。崎山さんは、紙の上で色を重ねる独自の方法を用いて、色に奥行きを出して

います。札幌出身の崎山さんは、ご主人の転勤で道内を転々としたあと、三十年ほど前から区内に住むようになりました。「引越してきた当時、家の近くにはこんな建物が点在していたんですよ」と言ってみせてくれたのが「廃屋」という作品。自宅周辺にあった農家の古く寂れた家屋を描いたものです。

崎山さんの作品は、今まで自然をモチーフ(題材)にしたものが多かったのですが、最近では心理描写の要素が入ってきたといえます。一九九九年度の「朝明け」については、「このころからモチーフのとりえ方が変化してきました。過去ではなくこれから、次の日もよりよく生きようとしている、無意識のうちに。そんな作品です」と語ります。

また、最新作の「偷生」は、赤が幾重にも重なり、深い色合いを醸し出しています。「このタイトルは命を惜しむという意味なんです」と教えてくれた崎山さんの目には、作品同様、明日を見つめる確かな光が感じられました。



▲「偷生」胸に迫る力強さを感じさせる作品



▲「朝明け」闇の中から光が差し込み、やがてすべてを照らしゆく様子が感じられる作品



▲「廃屋」昔懐かしい豊平の風景を記録に残そうと描いた作品